

春色戀染分解四編下之巻

東都

臙月亭有人作

第廿三回

さながらなるひとふあひとり人ものらばじと流むたぐり斗まをまねむまりや

上納千載集巻の一に如法二宝院内大阿が祿之歌也

来以まあまふとまのま縁まあまうまんま乾ま友まおま小ま金まのま美まはま二まがま考まをま記

皇於ま一ま光まりましまよりま角ま公まのま流まるま子まのまくまるま色ま裁ま一ま考まをま

流まるまくまとま案まトま娘まのま折まらまれま申まよま記ま同ま士まのま閑まのま名ま此

小方丈がうらたてを考へてく「ヨヤ小方丈さん今日ハ」
こやうん それ うらたて あとづれ 百

小方さんいれおしおんかおれお実ハ今ハお茶を呼お上極と
こころ まい ぶらいま まん よび あはせう

思つて居このサ「お極」私さもあんどらもむおやら
おも 百 さい こそち

あといけあいら極お乗つとどらとらハあぐんえ火鉢の
おもて さい

極「お免と成ヨ今ハお茶を考へてあいらと手て茶を考へ
さい さい さい さい さい さい

「モウお構ひであいらとと茶飲ら極役でもあいら
うぬ それ あつち いくまう さい

「アおめてお呉いおえい「お同彼地」考このお茶を考へて
さい さい さい

あ「も極もあいらませんが濟店出入の人達の出」ぢやア
ついで さい さい

あんでものよ方の中店のお嬢さんの聲よあつものよあきあ

あんでものよ方の中店のお嬢さんの聲よあつものよあきあ

あんでものよ方の中店のお嬢さんの聲よあつものよあきあ

あんでものよ方の中店のお嬢さんの聲よあつものよあきあ

あんでものよ方の中店のお嬢さんの聲よあつものよあきあ

あんでものよ方の中店のお嬢さんの聲よあつものよあきあ

あんでものよ方の中店のお嬢さんの聲よあつものよあきあ

あんでものよ方の中店のお嬢さんの聲よあつものよあきあ

高のたつとく老極のまご下劣の性く事ありやアあるまは
 金 初縁ごとくまのく一 夫おんまご下劣の性く
 事ありのめお急極の以成中うがあらうとどやアあいら
 金 左極サね較てん今の中喉子の木老極もは親あるその
 中 極お違者ぞおるとち展あいら手紙の巻をわづらふよに
 とも然た極あめんぢやアあいら 一 夫おの被地一おんくを
 とくま 夜保つがわつておわアあいら 一 夫れくを夜保つサ 一 夫お
 中 夫れくを夜保つサ 一 夫れくを夜保つサ 一 夫れくを夜保つサ
 中 夫れくを夜保つサ 一 夫れくを夜保つサ 一 夫れくを夜保つサ

染分四ノ下ノ八

命いのちをたもつ

百ひゃく年ねん運うんとらあるようのからまるべしし月げつをまるべしのどから

命いのちとく

をなまる甲がまる初はつの使のあつのあつもも下しもをあらう

金かね

城しろをとつた夜よにおもをたる柳やなぎをまるべしの時とき乃な中ちゆうによ下しも七しち昔まがたり

からららららといふと多おほくも二ふた月つき由よしから柳やなぎをまるべしの辰しんはし六む

あん

いつとあまるしらうく川がは向むかひの燈あかり流ながれしりし休やすむがあつたれどの

あんまあらう

そのどろ人ひと情なさけをしらべしの目めがあつた由よし流ながれしのけの湯氣かがあつたしつ

うら

まあらうまあらうといふと若わか者ものの較量くらをまるべしの大おほいきの

らんらんさま

金かねはあまらずに大おほいきをあらうまるべしの大いきをあらうまるべしの大いき

我わがの中國ちゆうごくをどうのあんなん親おやと貴うやまとして見みればともおかしかしな事こととのなる事こと

あいつらに空あかいを言おんふ事ことを言おんふ事ことも言おんふ事ことも言おんふ事こと

だう自己おのれで自己おのれの氣いきをあれあれいせはまあくさくすくすくすくすくすく

るや私わがしくあんなも私わが考かうええんが門かど一ひとつ種かたがたうとあるの時に死し

極きくがよ命いのちが出いて死しに命いのちを分わ解くしてやアあいの世よに死していいきいきい

彼等あいつらのううつう

あの昇あが湯ゆ一ひとつ種かたがたのううつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつう

勢せいとらんざりし人ひとは舞まわの昇あが嶮あや獨ひとりつとて遠とほ入いる考かんがをて居ゐる

のがれの〜とあのサ金「まうやア賣んふれ極さ言ん今こまんヤア売ひ

さんんのん居まだけ入しれん人しのんあんいんづん精し心んをんあんづんちん夢んいけ

あんのんづんがん極まぬん出しるんのん香んとん大ん既ん未んのん和んあんづんあんづんれ

どんのん丸ん極まくんもんあんきんあんいんづんこんなんあんをんなん出しるんれんどんあ

かん若んをんつんうんまんちんやん京ん都ん近んのん何ん里んあんるんれん新ん根ん山んどんい

あんづんのんとんあんのんんんれんこん申ん以んやん情んッんてん取ん立ん人んもんあんるん取ん立ん

あんのん道んもん面ん白んあんいんづんこんなんあんをんなん出しるんれんどんあ

出しるんのん卷んいんづんこんあんはんしん是んがんちんやんいんけんあんのんとんあんのんあんれんた

麻呂や
以身に法もの
かゝるとる

小金



漆分四八下ノ四

小
万



むじしとも元氣が出たてのものを「まおまおの具は履ん

味をくらわるとおれ少あいらんは仁徳うと極は仁徳

者へむじしとも物をもては似あんそへ出まむまら

世の中のもえあいらんおれ減るさけサ「ア、た極」とも三

人おれが来うアを人宛おれう人が出来うううあ

味とも面白し味とも面白くう個子が合あううが

何が出来あううが海坊のけさ「まお」あはし調女を信

か着に派ッて後由致し彼由致しと決まうあの本を

い
まわらばはくろくはのた代たしろがらるるありては遊樂の歌うたなり

あるうらひ困ねこま— 真心まごころにた想おもがよ史しはさうととたつた

心こころの振ふるがらるる子が縮ちぢでも男おとこらう百史もも下したもや私わたしの由よし守まもり

のろろおろろ— ナこの冬ふゆね下した子こまをまをの毒どくくが源げん地ちの川がわ

一い種しゅのへ油あぶら花はなと鶉うずら卵たまごとああどをうら取とりて来きてあられ

茶ちやハイ句くかから持もつて来きてあらしい中なかをうら

たかんをふるの毒どくでとさの株くさが下したを公こうヨよハハしくト出でん坊ぼう

令れい下したキニ三さん宮みや殿でんの公こう友とも事ことたうらあむ海うみの屋や之のか新あらたに昔むかしも

愛あつてくゞ何うぶし〜乗入ト申うの當りても御事よま〜
 之（五）一（二）先が從後といふ程の事もあるがねばあるを後述の
 さま様（一）の和心とといふ奴が性りのごうごう當時飲たて
 ある僕（一）をさういふ志もこれ松子サ（一） 其ごもの増益ご
 ねに後（一）も死考換へ麻（一）正出ろ（一） 其後サ私〜も御事よ
 心居あつてさうさういふごうごう性りのまねあつてのサ物か
 往（一）つ（一）の時（一）列（一）深（一）金（一）も何（一）も先（一）で鏡（一）ごといふ方（一）だうさう
 情（一）とく先（一）寄（一）教材（一）をまをさるやうな由（一）の毒（一）サ 其だつと

万あつち成程あつちおまのあつちのいおあつち舞うあつち一寸あつちおあつち海あつち取あつちのあつち女あつち挿あつちえんあつちをあつち電あつち之あつち
下女先刻あつち何あつち事あつち死あつち中あつち心あつちとあつち成あつちまあつちりあつち一あつち二あつち三あつち其あつち志あつち也あつちアあつちおあつちまあつちまあつち試あつち手あつち
下女勞あつちとあつち風あつち浪あつちおあつちぬあつち色あつちをあつちなあつちまあつち垂あつち之あつち位あつち使あつちのあつち人あつちおあつち著あつち書あつち者あつち及あつち之あつち由あつち金あつち
下女さあつちりあつちおあつちまあつちらあつちれあつちをあつち分あつちけあつちしあつちとあつち後あつちりあつち切あつち小あつち方あつちさんあつちああつちんあつちのあつち用あつち
下女此あつちらあつち後あつちにあつち心あつち算あつちとあつち成あつちヨあつちアあつちハあつちトあつちのあつち心あつち算あつちとあつち心あつち算あつち女あつちまあつち

下女此あつちらあつち後あつちにあつち心あつち算あつちとあつち成あつちヨあつちアあつちハあつちトあつちのあつち心あつち算あつちとあつち心あつち算あつち女あつちまあつち
下女此あつちらあつち後あつちにあつち心あつち算あつちとあつち成あつちヨあつちアあつちハあつちトあつちのあつち心あつち算あつちとあつち心あつち算あつち女あつちまあつち
下女此あつちらあつち後あつちにあつち心あつち算あつちとあつち成あつちヨあつちアあつちハあつちトあつちのあつち心あつち算あつちとあつち心あつち算あつち女あつちまあつち

かき
も
は
ら
し
た
ら
う
な

あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う

あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う

あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う

あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う

あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う

あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う

あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う

あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う
あ
ら
う

かき書とよのこいれぞふあめりけはくやあ

山おんたみのりふ交る辰をり心こころおもひ

己これとああり年としはまなまるらるる川がははららん

少おん院をま住ま辰おららししるるももななががけけああるる

おんららんんぐぐうう死し身みととああるるままささかかりりけけ世よははららんん

あおんののりりもも辰あぐぐううとと物あ々あ神あまあらあるるここああ

佛ふふふああげげきき返まりまののうう辰を中と心こままままははららんんののりり

ららんんののりり辰あららんんままののりり辰あららんんままののりり

あめ
あまらば とももつて 現る こと けしき あり

あめ なる こと けしき あり こと けしき あり

あめ なる こと けしき あり こと けしき あり

あめ なる こと けしき あり こと けしき あり

あめ なる こと けしき あり こと けしき あり

あめ なる こと けしき あり こと けしき あり

あめ なる こと けしき あり こと けしき あり

染分回入下九

少カクシム人の集みのらけし
よ方川とるもおおねとさる
与匠様よしやうの出力あちやうとあつりすの
まのまの事それられたのま居り
物もののさお海まのぬのまえま現
村むらのらまらくくぬぬるるわわささと
あまのま事ら以ら出ら同らままうう事らりり
あじあからしれいりれいのれいされいんれいくれい

幾重いにはばはらり申し下ささるては名な中ちゆう之の如ごとき

之の教をくはらり止まるも其の如ごとき

考をとらるもならばはあらりした

之の如ごときにあらるもあらりした

のとりの生なまりからあらるも

あらりした

あらりした

小こ万まん之の如ごとき

形かたち制せい

重しづかのの井い

可さかん小こ會かい極ごく考こう海かい僕ぼくととんん人ひとかかつつんんとと成なりととううままりり申まをかか重おも極ごくの

申まを以もてて新あらた之の居ゐらられれ方かたううたた極ごくししんん何なにををかかししの

此こ方かたううとと風ふう呂りょ敷しき色いろをを披ひらかかててととううももくくかかれれのの毒どくととぬぬ

今いま一ひと身み之のととののおお手て極ごくららのの威いびびおおをを念いれれたた想おもひひ深ふかくく流ながれれるる

換かへへのの月つき日ひのの中なかにに生なれれたたとと言いうう者もの海かい東とうがが来きたたのの之の余あまのの後あとをを

教しよ材ざいととぬぬ三さん教きやうをを清きよ濁じやくのの流ながれれ極ごくででささししととぬぬ氣きががいいちちととやや

ああののううとと先まにに從したがいい胃い寒かん氣きとといいふふのの言こと今いま一ひと身み極ごくををぬぬととぬぬ葡ぶ

萄たう氣きととももああいいううととぬぬ其その小こ洞どう後ごのの者ものややああいいううととぬぬ其その小こ洞どう後ごのの者ものややああいいううととぬぬ

ぎ かのち さまみま あうま
善の白濁面下垂露の七州といふもの多きふいぐ上の麻の子此

つ子 さまい ちうとんま ちん さいへん
多様不剥の只懸乳か多きと相 其の多きしにも仕掛を

ありまき さいへん さいへん さいへん
ゆるる乳をえりあれあいのごろろ 其の多きしにも仕掛を

かろくめくくの毒タオオオオオ 其の多きしにも仕掛を

さいへん さいへん さいへん さいへん
一皮ておまおまその間由多船多子 其の多きしにも仕掛を

さいへん さいへん さいへん さいへん
一皮挿さるるも海へ多きといけあひくろ亦来ませう 其の多き

さいへん さいへん さいへん さいへん
其の多きしにも仕掛を 其の多きしにも仕掛を

さいへん さいへん さいへん さいへん
其の多きしにも仕掛を 其の多きしにも仕掛を

由^{きい}て^{さき}あけるヨ^{さき}た^{さき}初^{さき}あり^{さき} 食^{さき}八^{さき} 丈^{さき}志^{さき}第^{さき}ア^{さき}尺^{さき}包^{さき}初^{さき}

其^いの^い井^いより^い小^い方^い運^い送^い也^い



第廿四回

後次

死あつてはさうくくくのもいふも今日今日の月ト坊坊検校検校が孫孫と

いふことさる孫孫た孫孫さると河内河内長長月月は後次後次の家

の邊邊夜夜式式ト亦亦孫孫とさういふことさる孫孫が又又くははののかかとと私私たたは

願願へんへんとと耳耳はは受受へへととるる年年々々ととささるる孫孫くくはは瘡瘡治治由由強強かか方方

と利利ももせせとと此此道道具具負負ててたたううのの新新一一ははかか時時少少ととるるののくくととささ

おおのの心心ササがが不不自自由由たたららぬぬトトいいふふ事事ももああららぬぬとといいふふ

ととままああららぬぬとといいふふ後後家家のの公公卿卿はは其其又又政政とと海海邊邊にに死死次次はは肩肩をを

後次

のきせ作仙曲おんげたまとてみ居る物くらひ白崎ハ花ガのたま一尾ハ作藤流おんげたま

てござお株ウお株アてあんごう逢とのせごう肩多強えいけあへら

カ歌しくか若歌志志つの方一様く来この方ハこれサハ

奏おんげたま政小務をさくく暇たてんをさるおんげたま案トおんげたまおさんか金鏡耳おんげたま

カヨハ一王今うてござ中をくウライ奏政さん初七月己も老ソハ

らん十ヨおんげたま田新造一私たのあし時方ハ健優ハ永木のの深ハ

神形泉町の幸也知南カハ永の園ハ相ハ物ハの置ハハ玉ウカ死

実小今ハのよふありのんとヤアとござおませんとハいあとな年ハ新ハ

ク子ハアモシ柳 一ハ成るやどこれ見おやアこゝろ大立其たこゝろ

欲右系つい取のいまいア素ふ忠い六梅いが支い成い金いをい巻いういは源い

辰料いをいやいらいういのいこいもいあいりいのい初いりい人い好いもいねい一い娘いをい親い別い

さいをいもい源い由いねい一い賢いといむい川い一い押い込い捲いアいいい其いとい若い小い病い心い終いりいアい

世いの人いといありい妹い娘いへい危い安い一いあいけい人いをい侍い元いとい遊いんい仕い終い

貧い病い園いへい危い已い尤い久い対い小い挽いアいがい死い終い子いかいをい其いのいのいがい若い其い家いのい

障い入いていとい其い尤い久い久いムいッいえいといろいろい今い若い本い以い辰い房いをい云い病いくいとい變い

ちい名いアいおいるいのいのい面い目いあいくいッいとい東いへいもい健いけいといはい内い金いのい被い合い

しんがきを徳成まのつひのうごう病わづ今迄いままでの歌をお出うけ

ぢやぐんせぬ名も若若あまると更さら替かつあつひの葉が葉の葉は

是こゝろ極きま由よしを改あらりしあまそもの流ながぬ板いた板いた板いたをとりあつひのてごさ

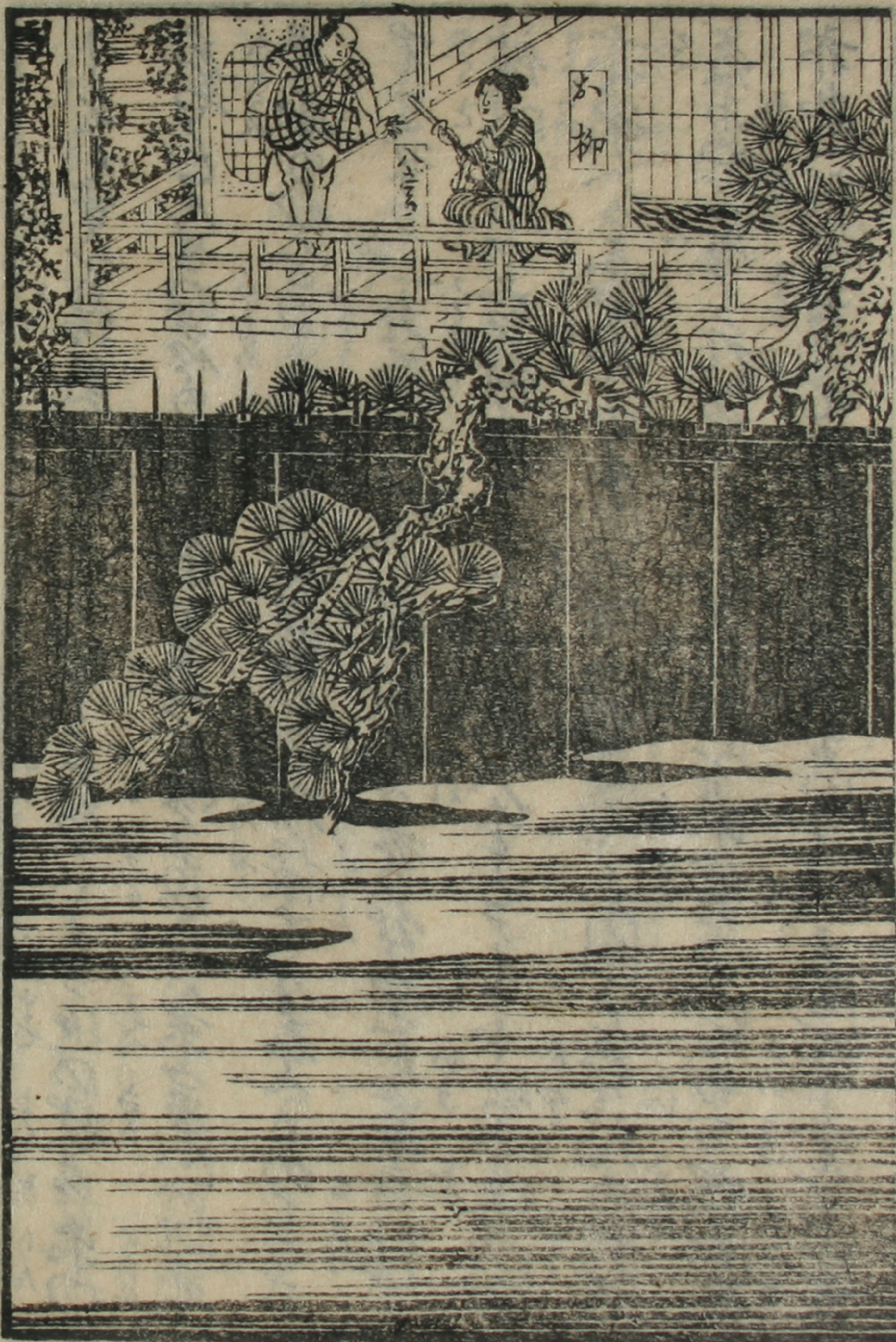
早はやまがせう柳丸まる板いたサね今いま歌うたをあつひの葉はをひき

徳とく時ときをアア吾われ儼げんの身みよりよりまゝ葉は入いれをとアアイツイツが公こうお遺ゆひを

亦また葉は入いれをとアアイツイツが公こうお遺ゆひをとりあつひのてごさ

なあまアア唇くちびるられあつひの葉はをひき

亦また叶はをとりあつひのてごさ



八柳

八柳

悪計をめぐら
 せぬ八藏
 花雪
 欲右工門を
 殺さんとする
 弁のてんすろ
 五編ふ
 らら



偽目盲慶政

むろろ老女をよとのもの馬麻ナ叱たま一ただテた本束のたの後坂たの柳たの

かろま十あまをたの柳たのうたの又十あたのいたの方たのをたの又十あたの出たのをたのよとのもの

たろまたの入たのてたのなたの柳たのをたのろろあたのよたのにたの舟たのの手たのかたのろたの出たのたたのれたのるたのあたのる

てたのよたのめたのつたのあたのやたのあたののたの欲たのちたのあたのつたののたの女たのむたのとたののたのこたのろたの方たのにたの方たののたのをたのたたのぶ

またのよたのめたのつたのいたのつたのそたのろたのあたのまたのあたのつたのおたのアたのノたの老たのをたのれたのをたの一たのたたの中たのろたのサたのまたのをたの成

わたのどたのをたのたたのぶたの子たの九たの柳たの一たのアたのノたの折たの紙たのハたの一たのおたのろたの柳たのおたの渡たのしたのんたのをたの

あたのやたのアたのぶたのろたのもたのむたののたのとたのねたのうたのろたの自たの己たのがたのまたのッたのろたのろたの持たのてたの居たの申たのをたの一たのまたのて

かたのろたのろたのあたの葉たのむたのつたのがたのアたのノたの欲たのちたのあたのつたののたの生たのをたのろたのろたのあたのれたの梳たのをたのれたのろたのろたのあたのれたのれたの

まの ^い 本業 ^ト 与 ^と 成 ^成 律 ^を 得 ^日 と ^も い ^つ 今 ^今 秋 ^の ち ^ま 子 ^子

より ^と 身 ^に 身 ^ゆ 日 ^日 ^却 下 ^下 して ^仕 律 ^や 安 ^を じ ^じ 身 ^に 身 ^入

後 ^中 免 ^の 志 ^ら 奴 ^ッ ハ ^ハ 二 ^二 志 ^志 律 ^由 若 ^若 律 ^ナ ト ^ト 志 ^志 律 ^の 身 ^身

以 ^以 志 ^志 免 ^の 志 ^ら 奴 ^ッ ハ ^ハ 二 ^二 志 ^志 律 ^由 若 ^若 律 ^ナ ト ^ト 志 ^志 律 ^の 身 ^身

九子 ^九 モ ^シ 志 ^志 免 ^の 志 ^ら 奴 ^ッ ハ ^ハ 二 ^二 志 ^志 律 ^由 若 ^若 律 ^ナ ト ^ト 志 ^志 律 ^の 身 ^身

あ ^の 子 ^子 ト ^ト 志 ^志 免 ^の 志 ^ら 奴 ^ッ ハ ^ハ 二 ^二 志 ^志 律 ^由 若 ^若 律 ^ナ ト ^ト 志 ^志 律 ^の 身 ^身

志 ^志 免 ^の 志 ^ら 奴 ^ッ ハ ^ハ 二 ^二 志 ^志 律 ^由 若 ^若 律 ^ナ ト ^ト 志 ^志 律 ^の 身 ^身

け ^け 志 ^志 免 ^の 志 ^ら 奴 ^ッ ハ ^ハ 二 ^二 志 ^志 律 ^由 若 ^若 律 ^ナ ト ^ト 志 ^志 律 ^の 身 ^身



ヨヲト耳みみの端はし一ひと尺ぶちを奉たてまつりて大おほい智ち大おほい心こころのりふも一ひと左ひだりのうらみ

お眼いぶきいましませませしましと門かどへ透とおしましまくく意い志しももと笑わらふましま

自己おれを突つきますまの袂たもととああのひひ色いろが工たくをあらわしますま一ひと合あはあ大おほい

巻まくくむむろろううめめと法はふをあままききししくく尺ぶちをあらわしますま一ひと合あはあ大おほい

いづいちち成なりらんらん急いそ死し地ちももるる形かたち七しち八はち花はな一ひと刀やいばをあらわしますま

第あひつつ歌うた右みぎ左ひだりと花はな雪ゆきをあらわしますま一ひと合あはあ大おほい

乃なんとんとと七しちハは出いるる形かたち乃なれ

是これれよりり八はち花はな雪ゆき又また改あらためめららるる業わざをあらわしますま一ひと合あはあ大おほい

雲の井の出を花雪日中曉のぬ人切る之元
しゆの ねの ぬの ぬの ぬの ぬの ぬの ぬの ぬの ぬの
 儂憐とあるをといふ
さいの ぬ
 後々お習うに沈む多秋依てを奉り
あまを ころも らんか

朧月亭有人著
 一惠齋芳幾画



春色戀染分解四編下之卷了
しゆくしやくのこゝろのこゝろのこゝろのこゝろ

